

ミュージックミラー

神戸大学附属中等教育学校 2年 高津 咲良

太陽の光で目が覚めた。ぐっすり寝たのでいい気持ちになりながら鏡を見るとある音楽が流れた。その音楽は誰もが知っている曲でもとても明るい曲だ。その音楽を聞きながらヘアセットをしたり、歯磨きをしたりと朝の支度をしたのでいい気持ちで入社することが出来た。朝からいいことが起きたので仕事の商談でも上手くいき、契約が取れ、いつも怒られている上司に久しぶりに褒めてもらえたのでとても嬉しかった。また、会社から帰ってきた後もいいこと続киだった。僕はそんな日が毎日続くといいなと思った。

次の日、朝起きて鏡を見るとまた音楽が流れた。その音楽は昨日と打って変わって暗い感じの音楽だった。その音楽を聞いて朝の支度をしたので暗い気持ちで入社した。そのせいで会社に行く途中に肩に鳥の糞が落ちてきたり、会社ではミスして、上司に怒られたりしてしまった。僕はこれは朝流れる音楽のせいだと思った。なので、朝に鏡を見なければいいと思った。

また次の日、僕は朝起きて鏡を見ずに朝の支度をした。案の定、鏡を見なかったため今日は音楽が流れ無かった。いつも通り支度したので会社では褒められず、怒られずという普通の毎日だった。僕はこれでもいいけどもつと契約を取って上司に認めてもらい、出世したいなと思った。

それから僕は朝起きてすぐ、鏡を見るとという生活を続けた。鏡を見るということは音楽を聞きながら朝の支度をするということだ。その音楽によって僕は契約を取って上司に褒められたり、逆にミスして上司から怒られたりするなどの一日の運命が決まった。

一ヶ月ぐらいこの生活が続いた時に僕はあることに気づいた。それは、みんな朝に鏡から流れる音楽を聞いて朝の支度をしているということだ。なぜ気づいたのかということの後輩が僕にある相談をしたからだ。後輩は僕に相談があると呼び出し、僕に向かって、「朝起きて鏡を見ると勝手に音楽が流れるんですよね。しかも、その音楽は日によって違っていて、明るい曲だったり暗い曲だったりするんですよ。明るい音楽の時は仕事が上手いって契約が取れたりするんですよ。でも、暗い音楽の時はミスばかりしてしまっって上司に怒られてしまうんですよ。私はこの音楽が元凶だと思うんですよ。どうしたら音楽を聞くことを止められるのでしょうか。」

と言った。この話で僕は周りの人も鏡から音楽が流れているのだと気づいた。他の後輩や同僚に話を聞くと、みんな同じ状況だと分かった。また、その音楽を止める方法も誰も知らないのですと困っていたそうだ。

その日の夜、テレビの特集を見ると、日本国内にある鏡から人が映るとその人の気分合った音楽が流れてしまうという現象がここ一ヶ月で起こっているというニュ

ーが流れた。僕は最近忙しすぎてテレビを見る時間を取れなかったので全国的に起こっている問題だと今日知った。でも、僕が推測した通り直す方法は無いらしく、一ヶ月もこの世の中で過ごしたのでもうみんな慣れていた。

慣れたとはいえこんな音楽に左右される人生は嫌だなとずっと思っていた。明るい曲が流れたらもちろんその日は自分にとっていい日になったし、最高の思い出になったこともある。でも、人生は一度きりというように悪いことがあってもそれは何らかの形でプラスに働くこともある。そのおかげでまた違う思い出もできると思った。なので、僕は音楽を止める方法を探そうと決意した。

半年後、僕は音楽を止める方法を見つけた。それは、自分の人生を大切にすることだ。この音楽が流れるという日々慣れてしまうということは、音楽に左右される人生でもなんとも思わないということになる。でも、僕はそれが嫌なので半年間なるべく鏡を見ず自分の人生を大切にして生きてきた。そうすると、鏡を見ても音楽が鳴らない日が続いてきた。この調子で自分の人生を大切に生きていこうと思った。

そんなある日、深夜三時ぐらいに音楽が流れて僕は起きた。音楽を止めようと僕は鳴っているほうへ歩いていった。そして、たどり着いた場所は鏡だった。人が映っていないのになぜ鳴ったのだろうと思ったが眠たかったのでそんなことを考える前に寝てしまった。ふと起きると、朝になっていて、鏡を見るとまた音楽が鳴った。深夜に鳴った音楽はなんだろうと思っていたが時間がなかったので急いで支度し出社した。